

ビデオ 通信

2022年
12月26日(月)
No.4630

月・木曜日発行
月額：¥11,000(税込：¥11,880)
発行：飯澤剛
編集：齋藤浩一

ユニ通信社

〒114-0024
東京都北区西ヶ原3-57-17-202
TEL：03-5422-7515
FAX：03-5422-7516
E-mail：vt@uni-press.net

映学社

「山田邦子の人生100年 気をつけて！高齢歩行者・自転車の事故」を制作
再現映像や実験などを交え、「どのように事故を防ぐのか」を紹介



（株）映学社は11月24日、高齢歩行者・自転車利用者向け交通安全教育DVD「山田邦子の人生100年 気をつけて！高齢歩行者・自転車の事故」（推薦：一般財団法人全日本交通安全協会）を、全国の警察署や交通安全協会に向けて発売した。交通事故による死者数は年々減少傾向にあるが、65歳以上の高齢者が占める割合は、逆に増加傾向にある。特に顕著なのが歩行中と自転車乗用中の事故。令和3年には722人の高齢者が歩行中、249人が自転車乗用中の事故で命を奪われている。交通事故の死者全体の1/3以上が65歳以上の高齢歩行者と自転車乗用中の高齢者となっている。「山田邦子の人生100年 気をつけて！高齢歩行者・自転車の事故」では、高齢歩行者や自転車乗用中の高齢者が注意することで、どのように事故を防ぐことができるのかについて、再現映像や実験などを交えながら、案内人の山田邦子が

「交通事故に遭わないためには、年齢に伴う体力の衰えや、運動機能の低下などを自覚しつつ、注意することも大切。人生100年、まだまだこれから！」と呼びかける。企画・制作統括を務めた同社代表取締役の高木裕己氏は「この作品を高齢者が集まる場などで上映し、「話題」となるきっかけにして欲しい」と話している。

高齢者の「歩行中」と「自転車乗用中」に注意！

近年、交通事故による死者数は減少傾向にあるが、65歳以上の高齢者が占める割合は、逆に増加傾向にある。高齢者の交通死亡事故を見ると「歩行中」「自転車乗用中」の事故が多くを占めている。「山田邦子の人生100年 気をつけて！高齢歩行者・自転車の事故」では、高齢歩行者や自転車乗用中の高齢者の事故防止に関して、次のポイントを重点に解説している。

▽歩行中の事故：歩行者横断禁止場所を横断している1人の高齢女性。横断歩道ではない上、信



号で停止した車の背後から横断しようとしている。そこに、女性の動きを全く予期していない自動車……。 「横断歩道を渡る」「横断禁止場所では渡らない」「車の直前直後は渡らない」「斜め横断をしない」「信号を守る」「交通ルールを守る」など、横断中に気をつけるポイントを解説。また、「車が来ていないか、止まったか、左右から来ていないか」「左折車に注意」「信号のない横断歩道では、車の動きに注意し、手を上げて横断の意思を示し、車が止まったことを確かめてから渡る」など、横断歩道を渡る時の注意点も学んでいく。

▽夜間の歩行：夜間の事故（特に夕暮れ時は注意が必要）を防ぐには、明るい目立つ服装とともに反射材を身につけるのが効果的。その効果を検証していく。

▽自転車の正しい乗り方：自転車事故で特に注意が必要な出会い頭の事故を防ぐ乗り方を紹介。ポイントは「乗車時にヘルメットを着用」「交通ルールをしっかりと守る」「自転車保険の加入」など。また、思いがけない加速に注意が必要な電動アシスト自転車を利用する際の注意事項、禁止事項をよく確かめた上で安全に利用することを訴える。

高齢者が集まる場で“話題”となるきっかけに

同作品を制作した目的について、映学社 代表取締役社長で同作品の企画・制作統括を担当した高木裕己氏（写真→）は「歩行中の事故は、自分の速度感覚や、見て確認する感覚の低下、錯覚などの現象が重なって、「何故、こんなところで？」といった場所で事故が起きています。もちろん個人差はありますが、単純に「横断歩道は、右・左・右を確認して渡りましょう」では済まない。コロナ禍もあって、高齢者が外に出なくなってきた分、足腰も弱っており、事故のリスクも高まります。また、確認・認識能力も低下しており、横断歩道を渡る時に自分では「右・左・右」と見ているつもりでも、片方を確認している時間が長く、反対から来る車はまだ遠くにいたと判断して歩き出してしまうこともあります。一方、自転車事故では、高齢者は「危ない！」と思うと急ブレーキをかけ、その場でバタッと倒れてしまい、頭を打ってしまうことが死亡の原因になっており、2023年4月から自転車乗車時におけるヘルメット着用の努力義務化が閣議決定されました。しかし、こうした高齢者の歩行時・自転車乗車時の事故を防ぐ方法や、「正しい歩行」などを指導する場所がなく、警察が高齢者の集まりなどに出向いてこういう映像作品を観てもらい、「話題化」しながら指導するしかありません。また、最近では全国交通安全協会の推薦の審査が年々厳しくなり、制作する会社や作品数が少なくなっています。さらに、高齢者になると「指導」や「教育」と言われると反感を買うこともあるため、今回はタレントの山田邦子さんが案内役・レポーター役を務め、「山田さんがこんなことを言ってるよ」といった、あくまでも話題作りのきっかけとして制作しました」と説明する。この作品を作っている最中、10月18日に横浜市内で起きた仲本工事さんの死亡事故も道路横断中だった。同社では“話題化”の観点からも、急ピッチで制作を進めたという。



「児童・生徒の自殺防止と SOS の出し方」教育シリーズ 3 部作

一方、同社では「児童・生徒の自殺防止と SOS の出し方」教育シリーズ 3 部作を、12 月 2 日に発売した。子どもが発する「SOS」をテーマに、子どもの自殺を予防するノウハウを伝授し、子どもの自殺を減らすきっかけとなることを目的とし、監修は元防衛医科大学校 医学教育部 教授の高橋聡美氏（医学博士）がとめている。

日本の子どもの幸福度は先進 38 ヶ国中 20 位、精神的な幸福度は 37 位と最下位レベル。子どもたちの多くが生きづらさを感じている背景の 1 つに、児童・生徒の自殺数の上昇に歯止めがかからないことが挙げられる。ここ 30 年で学校が把握している自殺数は 2 倍以上に増え、2016 年の自殺対策基本法改正後も増加し続けている。同社では「親との関係が良くない」「友達とうまくいかない」「部活でレギュラーを外された」「家庭の経済的な問題」などの生きづらさから、自殺への一歩は始まっており、この生きづらさをいかに解消していくかが、自殺予防対策の鍵といえる。とし、「児童・生徒の自殺防止と SOS の出し方」教育シリーズとして 小学校中・高年向け「君は、ひとりじゃない～ SOS の出し方、知っていますか～」、中学生・高校生向け「誰にも相談できない？～ SOS の出し方を知っておこう～」、指導者・保護者向け「SOS が届いたら～相談にのれる心構え～」の 3 部作を制作した。子どもたちには「SOS」の出し方や、相談できる大人の見つけ方を伝える。

一方、保護者・指導者向け作品では「SOS」の受け止め方や自殺リスクの高い子どもへの対処法を教える。いずれも再現ドラマで実例を紹介し、実践的に学ぶことができる映像教材となっている。

高木氏は「子どもの自殺の主な原因はいじめだけではなく、小学生では家族からのしつけや叱責、中学生では学業不振、高校生は進路問題が主な原因で、児童・生徒の生活環境が大きく関わっています。誰にも相談できず、相談しても相手にしてもらえず、最終的にはストレスを抱えて命を絶っている。文部科学省では「SOS の出し方に関する教育」を推進しており、「3 人くらいの大人には相談しよう」という具体的な指針を出しています。学校でもスクールカウンセラーを置いています。が、「相談したことが友達にバレないか」という不安があり、近隣者との関係も昔とは違いますから、みんな SNS に頼ってしまう。SNS 空間に作った自分たちの世界の中に引きこもり、そこから自殺願望になったり、犯罪に巻き込まれたりするケースも増えています。今回のシリーズの大きな目的は「聞く力をつけよう」です。子ども向け作品では、クラスの中に悩んでいる人がいたらどうするか、「黙って悩みを聞いてあげる」がいかに大切であるか。大人向け作品では、子どもから出た SOS の受け取り方、子どもの受け止め方などを紹介しています」とする。

さらに、同社では、ストーリーミングによる教材コンテンツの配信にも着手している。

高木氏は「適切な目的とタイミングで映像を制作するとともにし、最適な手段でコンテンツを提供できるよう、これからも様々なチャレンジをしていきたい」と話している。

◇映学社 <https://www.eigakusya.co.jp/>



(上から) 小学校中・高学年向け、中学生・高校生向け、保護者・指導者向け